

## 晩年

25	恭仁山荘に 隠居	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都大学を退職し、名誉教授となる。20年間の講義内容の整理にとりかかる。</li> <li>整理・研究・執筆に専念のため、人を避け「恭仁山荘(くにさんそう)」に移ったものの、ひっきりなしの来客を受ける。</li> <li>※恭仁山荘とは、京都府瓶原(みかのはら)に建てられた湖南の新居である。</li> </ul>
26	ご講書始め、 最高の栄誉!	<ul style="list-style-type: none"> <li>ご講書始めの進講を仰せつかり、中国唐代の杜佑が書いた歴史書『通典』を解説した。</li> <li>※ご講書始めにて皇族方に進講を行うことは、当代最高の学者の証。</li> </ul>
27	豊富な知識・ 見識が頼り!?	<ul style="list-style-type: none"> <li>満州国を建国させた日本政府から、豊富な知識と見識を買われて協力を乞われる。</li> </ul>
28	病を押して 満洲へ	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本政府に乞われ、病を押して満州国へ赴く。満州国の内務大臣鄭孝胥(ていこうしよ)と会見する。</li> </ul>
29	満州国総理 大臣を歓待	<ul style="list-style-type: none"> <li>満州国総理大臣鄭孝胥の表敬訪問を恭仁山荘にて受け、歓待する。</li> </ul>

## ゴール

30	虎次郎、永眠	<ul style="list-style-type: none"> <li>68歳、永眠。郷里、毛馬内仁叟寺の墓に遺髪がおさめられる。</li> <li>没後、晩年執筆の中国史のまとめが、親しい研究者らの手で整理され、『支那上古史』『支那中古の文化』『支那近世史』『清朝史通論』として出版された。</li> <li>湖南の全著作は「内藤湖南全集」全十四巻として出版されている。</li> </ul>
----	--------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### 【遊び方】

- 基本ルールは「すごろく」ですが、**もっとも遅くゴールしたプレイヤーが勝ちです。**
- はじめに「エピソードブック」の**マス番号0のエピソードを読みあげてスタート**します。
- プレイヤーは順番にサイコロを振って、出た目数だけ自分の駒を進めます。
- 止まったマス番号のエピソードを読みあげて、**みんなで湖南先生の知識を深めましょう。**
- もし、イベント発生マスに止まったら**エピソードを読み上げた後**、その指示に従います。そして進んだり、戻ったりした先のマス番号のエピソードも読み上げます。



### クイズの答え

7	B	特別に英語をおそわったり、様々な面倒をみてもらった。
11	B	21歳のとき上京し、ジャーナリストになっている。
17	A	辛亥革命(1911~12)後、来日し京都で内藤湖南など、京都帝国大学の中国学の学者達と交流を持つ。帰国後は溥儀の家庭教師を務めた。

# 内藤湖南人生すごろく

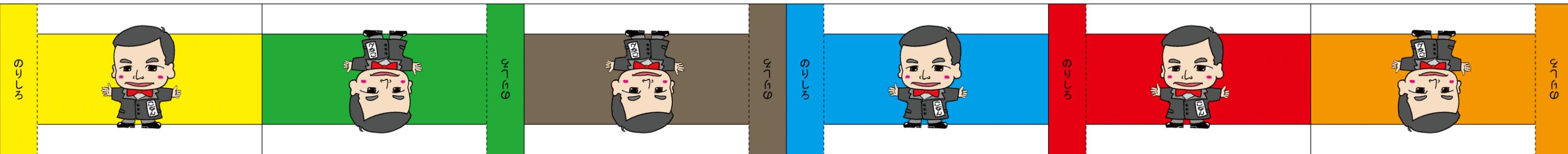
## エピソードブック

### スタート

0	虎次郎、誕生	<ul style="list-style-type: none"> <li>父は調一(十湾)、母は容子。内藤家の二男として砂場(すなっぱ)で誕生。</li> <li>1866年が寅年であること、尊敬する吉田松陰の本名が「とらじろう」であることから父が命名。のちに湖南と号する。</li> <li>父、母、兄、姉、祖母の家族6人で暮らす。</li> <li>※砂場は、毛馬内にある地名。現在は休憩にはピッタリなちいさな公園になっている。</li> </ul>
---	--------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### 幼少時代

1	はじめての 筆にワクワク	<ul style="list-style-type: none"> <li>「寸陰館(すんいんかん)」の副校長を務める父のもとで、半紙に「いろは」を書き、筆を使う喜びを初めて味わった。</li> <li>漢字ばかりの『二十四孝』で書物の読み方を習い、『四書(ししよ)』の素読も教わる。</li> <li>(8月)満4歳、大好きな母を亡くす。</li> <li>※明治3年江刺県(現・新潟県)のとき、政府の「小学校建設令」に応じて、遠野にあった郷学「信成堂」を再興して「寸陰館」と命名。「花輪寸陰館」はその分館。</li> </ul>
2	父と2人きりの 暮らし	<ul style="list-style-type: none"> <li>祖母と兄の相次ぐ死。年の暮れには15歳の姉が木村家に嫁ぐなどして、父と2人きりの暮らしになる。</li> </ul>
3	仲良くなれる!? 父の再婚	<ul style="list-style-type: none"> <li>父は連れ子のあるミヨと再婚。</li> <li>継母(けいぼ)ミヨは陽気な人ではあったが、連れ子(レツ)ともあまりなじみず、寂しい思いをした。</li> </ul>
4	評判の秀才、 小学校へ 入学	<ul style="list-style-type: none"> <li>尾去沢村にできた又新(ゆうしん)学校に入学、5年間勉強することになる。</li> <li>遅くまで勉強し、家に帰ってもまだ勉強した。</li> <li>「この田舎から出たい」という思いから向学心を燃やし、父が好きな『日本外史(にほんがいし)』や『左伝(さでん)』も読んだ。</li> <li>学校対抗の学力競争に勝つと、虎次郎の作文能力が注目された。その作文は新聞にも掲載された。</li> </ul>
5	漢文の読み 書きも おてのもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>15歳で明治天皇東北巡幸の際に奉迎文(漢文)を、16歳で祖父の墓参りの際に祭文(漢文)を作った。</li> <li>父が念願である家を毛馬内に新築し、「蒼龍窟(そうりゅうくつ)」と名付けた。</li> <li>父は尾去沢の元山小学校の教師となり、虎次郎は父の手助けをした。</li> <li>※明治天皇東北巡幸…1881年(明治14年)、北海道、青森を経て秋田県境の矢立峠から大館入りした。蝦夷地への行幸は日本の歴史上初めてのこと。</li> </ul>



## 青年時代

6	秋田師範学校に入学！	<ul style="list-style-type: none"> <li>おさえがたき学問への思いを父に打ち明け、「蒼龍窟」に帰って受験勉強に専念した。</li> <li>漢文、作文、習字、算術、修身(道徳)などの試験科目で高得点を取り、一番の成績で秋田師範学校中等部に合格した。</li> </ul>
7	ストライキのリーダー!? 注目の的!?	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業をサボって遊びに行ったことで退学という処分を不服とした学生たちがストライキを起こす。作文の才があった為に頼まれて「意見書」を書いた虎次郎は、リーダーと目され注目をあびてしまう。</li> <li><b>【クイズ】 さて、その後に虎次郎はどうなった?</b> A 退学処分になった B 先生に目をかけてもらった</li> <li>※答えは4ページ</li> </ul>
8	無二の友 岸田吉蔵と出会う	<ul style="list-style-type: none"> <li>ストライキ「意見書」事件をきっかけに、無二の親友となる吉蔵と出会う。吉蔵は年上ではあったが、互いの才能を認めあい尊敬しあう仲だった。</li> <li>※岸田吉蔵は、日本の個性を顕彰し国粹思想を標榜した政教社でジャーナリストとして活躍した畑山呂泣のことである。</li> </ul>
9	飛び級!? 高等部に編入	<ul style="list-style-type: none"> <li>「虎次郎の成績ならばやっつけていけるだろう」と先生たちに推薦され、高等部への編入試験を受けて合格した。</li> <li>仕送りのほとんどを書物の購入にあてる学生生活の中、岸田と共に教師や教会の牧師からは英語を教わった。</li> </ul>
10	家出、結婚はイヤ～!	<ul style="list-style-type: none"> <li>継母の連れ子レツとの結婚話がもちあがり家出。</li> <li>家出の先々から「承服できない」という手紙を送り、二度も父に連れ戻される。</li> </ul>
11	師範学校の卒業間近、悩める日々	<ul style="list-style-type: none"> <li>卒業後には教職につくべしという約束があった一方、「東京で勉強したい!」という思いもあった。のちに東京に出ることになるが、この頃は悩める日々だった。</li> <li><b>【クイズ】 さて、東京で勉強するにも生活費が必要です。どうやって稼いだ?</b> A 海賊王になって金銀財宝を手にした B ジャーナリストになって給料をもらった</li> <li>※答えは4ページ</li> </ul>
12	新たな教育方法にチャレンジ	<ul style="list-style-type: none"> <li>通常4年かかるところを僅か2年半で卒業した2か月後、20歳の若さで鷹巣町綴子小学校の首席訓導(校長)に任命される。</li> <li>首席訓導として、教師用の教科書を作ったり、理科の実験や遺跡発掘など新しい教育方法を取り入れた。</li> </ul>

## ジャーナリスト時代

13	ジャーナリスト人生スタート	<ul style="list-style-type: none"> <li>師範学校卒業時の決意は固く、首席訓導を辞任。</li> <li>父に内緒で上京し、雑誌社「明教新誌」に就職。ジャーナリストとしての人生を始める。</li> </ul>
14	結婚!	<ul style="list-style-type: none"> <li>ジャーナリストとして活躍する中、30歳のとき、同郷の田ロイクと結婚。</li> </ul>

-2-

15	「台湾日報」の主筆となる	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の深い見識が見込まれて「台湾日報」の主筆となり、台湾に駐在。</li> </ul>
16	新たな決意	<ul style="list-style-type: none"> <li>小石川の下宿が全焼し、亡き親友・畑山呂泣の「遺稿集」の原稿も焼失。</li> <li>この火災をきっかけに、学問の道すなわち中国問題の第一人者となるべく専念。</li> </ul>
17	学問のための中国旅行	<ul style="list-style-type: none"> <li>秋田県出身の榊田清兵衛らの援助を得て3か月間の中国旅行へ。</li> <li>羅振玉など多くの中国の学者や政治家と出会う。</li> <li><b>【クイズ】 さて、その後に羅振玉は何になる人?</b> A ラストエンペラー・溥儀(ふぎ)の家庭教師 B ラストサムライのお師匠さん</li> <li>※答えは4ページ</li> </ul>
18	中国旅行を重ね、学問を究める	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝日新聞社(大阪)に再入社。2回目の中国旅行では、各地の図書館で古い書物を調べ、いくつもの貴重な史料を発見した。</li> <li>外務省からの依頼で、花輪出身の大里武八郎を伴った3回目の中国旅行へ。日露戦争後には4回目の中国旅行へ。</li> </ul>

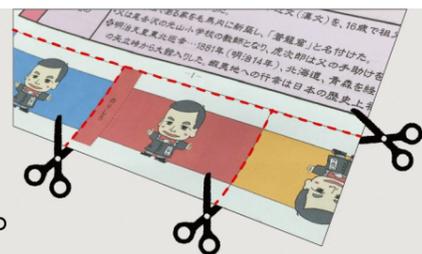
## 京大時代

19	東洋史学の講師になる	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都大学から誘いを受けて、東洋史学講座の講師になる。</li> <li>父調一、亡くなる。</li> </ul>
20	講義は大人気!	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都大学の学長の尽力もあり、教授に昇進。翌年には博士号がおくられる。</li> <li>湖南の「東洋史第一講座」の講義には大勢の学生が集まり、中には他の学科や学生でない人までもいた。</li> </ul>
21	日本史もイケるのだ!	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本史に関する貴重な論文を『文芸』に発表している。それは「邪馬台国は近畿地方にあった」と推定する「卑弥呼考」である。</li> </ul>
22	でた、名言!	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本や中国の優れた絵画を評価する目も鋭く、東洋の肖像画では藤原隆信が描いたといわれる伝『源頼朝像』を最高傑作であると評価した。</li> <li>大正10年8月、史学地理学同友会の講演「応仁の乱に就て」の中で語られた言葉は広く知られる。曰く「日本史を知るなら応仁の乱以後を知れば十分」。</li> </ul>
23	次々刊行	<ul style="list-style-type: none"> <li>黄疸が出て床に伏せり、1923年3月には胆石のために入院、手術を受ける。この夏には避暑のために有馬温泉へ。</li> <li>『日本文化史研究』『新支那論』を刊行。「中国をどう見るか、中国にどう向き合うか!これこそ日本にとって、重要で難しい課題である」と指摘する。</li> </ul>
24	広い交際範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>文化的に必要な教養とされた「漢詩を読んだり作ったりすること」が徐々に下火となる時代に、中国人でさえ舌を巻くほどの数少ない漢詩作家であった。</li> <li>学者や芸術家、ジャーナリストにとどまらず、多岐にわたる親密な交際があった。殊に、重要な立場の政治家、西園寺公望、小村寿太郎、犬養毅などが挙げられる。</li> </ul>

-3-

## コマの作り方

① エピソードブックからコマ6個を切りはなす。



② 丸めてちょうど良いクセをつける。



③ のりしろの点線に合わせて貼りあわせる。



できあがり